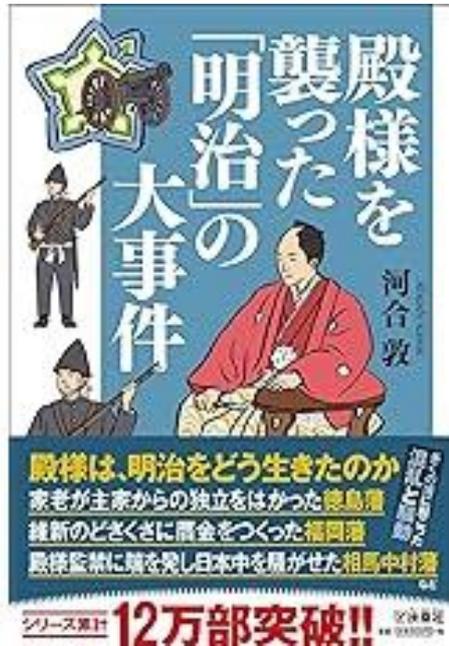


タイトル『殿様を襲った「明治」の大事件』（全 208 ページ）

出版社：扶桑社

発売日：2022年12月23日



著者紹介：河合 敦 [カワイアツシ]：歴史研究家、歴史作家、多摩大学客員教授、早稲田大学非常勤講師。1965年、東京都生まれ。青山学院大学文学部史学科卒業。早稲田大学大学院博士課程単位取得満期退学。歴史書籍の執筆、監修のほか、講演やテレビ出演も精力的にこなす。

内容説明：明治になってから大事件に見舞われ、お家存亡の危機に陥った殿様たちがいた。たとえば、藩の尊王攘夷派が暴走し、新政府の転覆をはかったことで、お家をつぶされた久留米藩主・有馬頼咸。大量の贖金をつくったことが発覚し、見せしめとして処罰された福岡藩主・黒田長溥。家臣たちに監禁され、毒殺の有無を確認するため墓をあばかれ解剖された相馬中村藩主・相馬誠胤。改易状態から新天地での開拓に成功した名門仙台藩の亘理伊達邦成など。知られざる明治の大事件と翻弄された殿様たちの人生を追う。

第1章 理は殿様にか家臣にか

○板倉勝静・備中松山藩一家臣の願いをよそに反新政府を貫き、ついには蝦夷地へ
:板倉勝静は、徳川慶喜の右腕として活躍したが、色々あったが結局、鳥羽伏見の戦いで敵

前逃亡の慶喜の「犠牲者の一人」であったと言える。リーダーの振る舞いがいかに部下の人生を翻弄するか、の話と言える。板倉は、明治5年に赦免され、最後は「上野東照宮の祀官」として生涯を終えた。

<追記だが、慶喜はいわゆる頭の良いだけの男でこんな時のリーダーとしては不向き、徳川家は人材不足で消滅の時期と言われてやむなしか。>

○島津久光・薩摩藩一新政府を最も警戒させた藩主ではない男

:島津久光は、名君の斉彬の次の当主の父親、国父として実権を握った。西郷は、最期まで久光が斉彬の毒殺を命じたと疑っていた。久光は、実際は空っぽの男で、基本は斉彬の路線を踏襲した。新政府が進める近代化を全く理解できず、しかし無視できる存在ではなく、大久保、西郷は最後まで対応に苦しんだ。廃藩置県に際しては、大反対であったが、大久保と西郷により認められた事になってしまい、他藩も認めざるを得なかった。

<追記だが、久光は、高慢ちきで、いかにもイジメッコの顔で、下品な顔のように見える。このタイプの人は常に世にあり、大久保も西郷も本当は大嫌いだったのでは。>

○相馬誠胤・相馬中村藩一忠義か、お家乗っ取りか。藩主監禁を軸にした明治の大事件

:14歳で藩主となった相馬誠胤は、その後精神に異常を来し、監禁・入院を繰り返す。そこを後藤新平等をバックに持つ錦織につかれ、十数年にわたる相馬騒動が起きた。錦織の異常な執着は、金銭目的とは思われるが、その裏には当時の精神医療の人権無視の政策があるのかも知れない。

<追記だが、時期が幕末から明治時期であり、法体制も整っていなかった事が、騒動を大きくしたのは。それにしても、いつの世でも人々はゴシップネタが好きだ。>

第2章 分裂・抗争を繰り返す藩内

○稲田邦植・洲本城代稲田家一主家からの独立を望んだすえの惨劇:

明治に入り、主家の徳島藩蜂須賀家からの独立を図った稲田氏一族は蜂須賀家の直臣に襲われ、子供も女性も殺害されると言うショッキングな「稲田騒動」が起きた。首謀者を含め加害者側の多くは、斬罪等厳罰に処された。稲田邦植とその家中たちは、明治新政府により、知行高は同じく北海道への移住を認められた。移住は必ずしも円滑ではなかったが、弟の邦衛が開拓を進めた。邦植は、徳島に隠居、その後男爵に叙せられた。

<追記だが、稲田氏の家祖は、主君の蜂須賀小六と義兄弟の契りの間柄で、独立大名を断り、1万石の家老として主家を支えた。しかし明治に入り、独立を目指した・・・初代から数代は良かったが、そんな思いは形骸化したのであろう。時間の経過は無残であると言える。>

○有馬頼咸・久留米藩一長い藩主生活を送るも家臣の対立で混乱:

11代有馬頼咸は、19歳で藩主を継いだ。その治世25年間は、家臣団の対立が絶えなかった。いったんは開化派が政権を安定させたが、皮肉にも明治維新のために藩内は争乱状態に陥り、頼咸は藩政を糺すことが出来ず、時代遅れの明治勤皇党に藩政を支配され、その結果、久留米藩は廃藩の四か月前に、事実上停止された。廃藩置県により久留米藩は消滅した。<追記だが、どうやら率先して藩政を担えるような人物ではなかった頼咸は、新時代の到来を、情報の遅れもあり、殆ど理解できていなかったのではないか。でも幕末に名君と呼ばれた殿様は、ほんの僅かであったようだ。>

第3章 旧藩士を守るため

○伊達邦成・仙台藩一門亙理伊達家一艱難辛苦のすえ北海道開拓に成功:

14代当主の伊達邦成は、戊辰戦争で本家の仙台藩が降伏した後、蝦夷地の開拓を決意。家臣と共に有珠郡の開拓に邁進する。士族授産がその目的の一つであり、特に戊辰戦争で敗れた東北諸藩の貧しい士族が多数応募した「屯田兵制度」は、当初は失敗続きで、亙理伊達家臣団の働きは大いに期待された。亙理伊達家臣団だけが開拓の成功を納めた理由は、(1)邦成が私財を投げ売ってまでも、旧家臣の救済を行った事、(2)家老の田村顕充の導き、義母の伊達保子の支援、(3)しかし最大の理由は、主君の邦成を「失敗と言う恥辱にまみれさせては成らない」と言う全ての家臣達の思い。その功績により、新政府より邦成は男爵を授けられ、華族に列した。現在の北海道・伊達市の礎を作った。

<追記だが、明治の新時代に際し名君と呼ばれた殿様は少なかったが、亙理伊達家臣団は幸せな方だったと言えるのではないかと>

○黒田長溥・福岡藩一藩主を辞したのちの贖金騒動解決に尽力

:薩摩藩主の13男として誕生した長溥は、黒田藩11代当主に。財政赤字を解消すべく、家老に財政改革を任せるも失敗し、以後親政を敷く。長溥は西洋の技術を用いた殖産興行を図るも、家中の強い反対を受けて頓挫してしまっていたが、巻返し、再び長溥の公武合体派でまとまる。ところが王政復古の大号令が出され、新政府はこれまでの経緯から福岡藩には極めて冷淡だった。戊辰戦争では兵の人的被害も多かったが、財政は一層悪化し、藩財政は破綻同然になってしまい、藩は贖金を作り、派手に使った。新政府は、多くの藩での贖金作りを取り締まるべく、構造・額により、福岡藩をスケープゴートにした。処分は、知藩事の長知にまで及び、版籍奉還の後ではあるが、事実上の黒田家の改易となった。長知を含め黒田家は命じられ東京へ移住したが、長知は翌年、岩倉使節団の一員となった。長溥は、教育や人材育成に非常に熱心で、その後半生も教育に力を注いだ。贖札事件で肩身の狭い黒田家であったが、明治8年に明治天皇は黒田邸に臨幸され、転機が訪れた。しかし、明治10年の西南戦争では福岡でも反乱があり、長溥と長知は主だった士族に対し「軽挙妄動」を慎むように強くいましめたが、努力は無駄に終わった。でも、明治天皇の覚えはめでたく、以後、黒田

家と新政府の関係を保った。長溥は、明治20年、77歳の生涯を閉じた。

<追記だが、黒田藩は賈金作りという悪事を重ねたのに、あまりに稚拙で、杜撰で、覚悟がなく、武士のレベルはそんなものだったのだろうか？企画とか計算ができる人材がいたのなら、財政の一層の悪化は防げていたのかもしれないが・・・。>

以上